

目的 住教育は学校教育、社会教育、家庭教育を通して可能であるが、それぞれに内容や方法に違いがある。その中で家庭教育は必要性が高いといわれながらも具体性の乏しい領域として研究上残されてきた。本研究は家庭の中での住教育の現状を把握して、その住教育の役割と可能な内容、方法を考察するものである。家庭教育の分担領域を明確にすることによって学校教育や社会教育の役割を考察することにつなげていくことができる。本報告は伝統的な住様式が次世代に伝達される実態と条件について述べる。

方法 滋賀県と京都市の小学校の5、6年生の親を対象に学校を通してアンケートを配布、回収した。有効回収数は6校691票である。調査時期は1988年6月

結果 伝統的な住様式のうち、住宅の条件と強いかわりのあるものとして、正座、敷居の通過、靴の整理がある。正座は84%の子どもが現在の住まいの中であることがあるし、77%の母親が正座をしつける必要があると回答している。正座は起居様式によって相違があるが、特に食事と、だんらんとのそれとの相関が高い。正座をしつける必要理由は行儀とならんで、姿勢が良くなるか高い比率を占めた。反対に不必要理由は個人の自由とか、伸び伸びさせたいという回答が多く、正座は発達に悪いか、窮屈というかでの不要論は少ない。靴を揃えて扱う習慣については、子どもがいつも揃えるは10%程度で、時々が54%である。これに対して親の反応はその都度注意したり、なおさせたり(両方で39%)するものの、積極的にしつけてきた親は22%程度にすぎない。そして、出入りが激しく、注意しても効果がないとあきらめている。(本研究は1987, 88年度文部省科研費の助成を受けている)